

氏名(本籍)	よこ やま わかこ 横山和加子(長野県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第1866号
学位授与年月日	平成14年7月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	スペイン領植民地先住民村落の教会堂に関する研究 —ヌエバ・エスパーニャ, タラスコ族の村落を中心に—
主査	筑波大学教授 博士(文学) 明石紀雄
副査	筑波大学教授 Ph. D. 池田裕
副査	筑波大学教授 博士(文学) 木村和男
副査	筑波大学教授 博士(文学) 小野澤正喜
副査	筑波大学教授 博士(工学) 日高健一郎

## 論文の内容の要旨

本論文は、ヌエバ・エスパーニャ（アメリカ大陸の旧スペイン領植民地）に先住民によって建設された教会堂の特徴とその建設を推進した諸要因を考察することを目的としたものである。研究対象は、主としてメキシコ中西部ミチョアカン州タラスコ地域ならびに周辺地域において16世紀末から17世紀初頭にかけて建設された教会堂である。

本論文は、序、二部九章、結び、地図・写真・表・文書一覧および文献目録からなる。序において、研究目的・方法・論文の構成が説明される。従来の美術史は、先住民による建築を西欧美術の末端に位置づけ、「亜流」と同義の低い評価を与えてきたが、本論文では、西欧とは異なる形が生まれるに至った「造り手側の論理」に注目し、その解明のために、美術史・社会文化史ならびにエスノヒストリーの手法を試みる事が明らかにされる。

第一部「タラスコ族の教会堂の美術史的考察」（第一章－第四章）では教会堂の特徴が美術史の視点から記述される。

第一章「西洋美術史における植民地美術の位置づけ」において、アメリカ大陸の旧スペイン植民地の美術一特に、建築一についての先行研究を精査し、本論文の視点を明らかにする。教会堂は宗教的活動の中心であったのみならず幅広い意味での民衆的芸術活動の所産であったことが指摘され、美術作品の様式の分析・解釈の域を超えて実証的研究を目指すこと、ならびに西欧建築との差異を生んだ植民地社会の現実を分析することが、筆者の問題意識であることが強調される。

第二章「タラスコ族の教会堂：一般的特徴」は、タラスコ地域の教会堂に共通した特徴を外郭（広場・石野十字架・屋外礼拝堂）、平面図・規模・正面・屋根・彩光・堂内、病院建築の諸点から述べ、その中でも特に、病院建築に注目した分析が行われる。これは本来的に村民の自治的運営による相互扶助を目的としたものであったが、布教のために設立された教会堂とは補完的な役割を果たしたことが指摘される。

第三章「タラスコ族の教会堂：正面」では、教会堂正面が取り上げられる。タラスコ地域固有の教会堂正面のスタイルが発展・普及する過程を検証した結果16世紀末に独特の様式一著者はそれを「ミチョアカン様式」と呼ぶ一が完成し、後の時代に普及していったことが分析される。また17世紀初頭から半ばにかけて、タラスコ地域

の大半の先住民村落で教会堂が建設されるもしくは刷新される「教会堂建設ブーム」が起きていたことが指摘される。

第四章「タラスコ族の教会堂：木製天井」において、タラスコ地域の教会堂の特徴である彩色木製天井が取り上げられる。その独特の構造と天井画による装飾法が成立した時期が確立されると共に、このような構造・装飾が生まれた背景として、先住民の被支配体験が深く関わっていたことが明らかにされる。

第二部「タラスコ族の教会堂の社会文化史的考察」（第五章－第九章）では、教会堂建設の背景が社会文化史の視点から検証される。

第五章「タラスコ族と植民地統治」では、タラスコ地域とタラスコ族の社会を考察するための初期的条件（地理・人口・産業・宗教・歴史・植民地統治制度）を概観する。

第六章「教会堂をとりまく空間：先住民村落」では、征服後に進められた新しい先住民集落の設立すなわち集住化と教会堂の関係を考察し、集住化と同時に教会堂が建設され、「教会堂建設ブーム」は集住化と関連付けられることが指摘される。またタラスコ地域では、集住化が推進された1540年代と16世紀末～17世紀初頭に、土地所有権や覇権をめぐる著しい緊張とライバル意識が生じていたことも明らかにされ、このことが、タラスコ地域の村々が競って教会堂の刷新に走った要因の一つになったことが指摘される。

第七章「教会堂建設のコスト：負担者とイニシアティブ」では、教会堂建設を支えた富がどこから捻出され、建設のイニシアティブを握ったのは誰だったかが考察される。17世紀初頭から半ばまでタラスコ地域、中でもシエラの先住民村落が経済的に非常に豊かで自力で自村の教会堂を建設する経済力を十分備えていたこと、その豊かさを支えていたのは革製品の販売にあったことが明らかにされる。さらに、この革製品の生産が、スペインによる植民地統治の根本にあったエンコミエンダ制（先住民を管理し労働力を確保するための制度）に由来するものであるとし、この制度は先住民を「奴隷化」したとする従来の解釈の修正が必要であるとする提起がなされる。続いて、17世紀の初頭に、各村落が教会堂の豪華さを競ったことが、建築ブームにつながったとする指摘がなされる。

第八章「教会堂を支えた信仰：病院制度と信仰の発露」では、タラスコ地域の先住民共同体の信仰のあり方を検討する。「村の病院制度」がタラスコ族の新しい共同体に経済的・社会的・精神的基盤を与え、17世紀になってからも、この制度が同地域の経済的豊かさと宗教的高揚を支えていたことが明らかにされる。さらに、タラスコ族の祭りが世俗的娯楽性を強め、教会堂や病院礼拝堂の祭具や聖像が豪華さを増すことに注目し、教会堂建設ブームもそうした文化的興隆の発露の一つではなかったかという指摘がなされる。

第九章「技術と職人：先住民職人」では、タラスコ地域の教会堂を制作した職人集団が考察される。彼らは主として先住民職人集団で、教会堂建設に労役を提供する中で育成されたことが明らかにされる。

結びにおいて、本論文の意義は、従来の西洋美術史研究が旧スペイン植民地において先住民がその制作に携わった美術作品－特に、建築－に与えてきた評価の方法を改める一つの試論であったことが述べられ、取り上げられた諸論点が整理されている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、ヌエバ・エスパーニャの教会堂に関して美術史、社会文化史ならびにエスノヒストリーの視点から実証を試みた意欲的な作品である。豊富な写真・図・表が示され、提起されている諸解釈は斬新で説得力を持つ。以下はその成果である。

第一に、中央広場、教会堂、病院礼拝堂がつくる景観－筆者はそれを「建築複合」と呼ぶ－がこの地域の先住民村落の典型であり、またタラスコ族において極めて独創的であったことを指摘し、タラスコ地域の社会文化史とエスノヒストリーに新たな知見を加えている。

第二に、同地域の教会堂の特徴を初めて網羅的に調査し建設時期を考証したことに加えて、「西欧美術との関係性」に代わる視点の可能性を示唆したことにおいて、美術史への貴重な知見を加えている。

第三に、タラスコ地域の教会堂に「表出した個性は、タラスコ族が植民地統治下で育んだ新しい共同体の特質に起因」したものであったとする解釈は、先住民の創造性を照射するものであり、高く評価される。

しかし、本論文に課題が残されていないとは言えない。第一に、美術史的考察と社会文化史的考察に分けた構成を取っているが、両者の整合性をさらに緻密にする必要がある。第二に、建築年代をより正確に査定するための文献史料について、さらなる検討が望まれる。第三に、過酷な先住民支配の典型として見なされてきたエンコミエンダ制が、やがて先住民の自立の道を切り開くうえで役立ったという解釈は、本論文において限られた範囲にしかあてはまらないので、その一般化への検討が必要であろう。

かかる課題が残されてはいるが、学際的方法を用い、17世紀初頭に始まるタラスコ地域の教会堂建設ブームという切り口で、教会堂の特徴と村落共同体の状況を重ね合わせるといふ本論の方法は、美術史においても社会文化史においてもこれまで試みられたことのないもので、結果として、両分野における貢献はきわめて大きい。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。